山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

第28号
2017年3月31日

山口県立大学
郷土文学資料センターだより
設立30周年記念号

郷土文学資料センター設立30周年を迎えて

稲　田　秀　雄（センター長）

山口県立大学郷土文学資料センターが大学附属機関として設立されたのは、昭和61年（1986）のことです。その開所式に際して作成されたパンフレットには、初代所長の上野サチ子教授をはじめ、研究員として、福田百合子、熊本守雄、武市眞弘、黒木章、野口義廣、安光裕子という当時の文学部国文学科所属教員の名前が掲げられています。また、センターの概要として、以下のように記されています。

本県出身文学者及び本県に関係のある文学資料の調査、収集、整理、保存、展示を行うことにより、郷土の貴重な文学資料の流出、散逸を防止し、大学における文学の教育・研究を一層推進するとともに広く県民に公開し、学芸の振興を図る。

▲　開所式　中山清次学長（当時）と上野サチ子所長（当時）

以来、当センターは、この設立の趣旨に基づき、着実な活動を続けてまいりました。平成6年(1994)には、学部学科の再編により、文学部の国際文化学部への改組がありましたが、当センター組織の核となる日本文学･日本語の領域は新学部にも受け継がれました。資料の調査・収集・展示以外の目標として、当初は『山口県文学年表』の作成という大きな仕事がありました。清原万里研究員並びに各地域の協力員の尽力により、平成13年（2001）に無事刊行することができました。また、設立以来始まった公開講座は、サテライトカレッジと名を変えつつ、現在までほぼ毎年、県内各地で開催されています。

その後、平成18年（2006）の独立法人化、19年（2007）の文化創造学科の新設など、大学組織の変遷はありましたが、その後も、それまで寄贈に頼っていた資料の(予算確保に基づく)積極的収集(特に、中本たか子・楢崎勤関係資料の充実)や目録作り(嘉村礒多・渡辺砂吐流・太田静一文庫)、鷺流狂言の大学公演など、あらたな事業も加えて、地道に活動を続けております。

平成28年(2016)、当センターは設立30周年を迎えました。それを記念して、山口県立山口図書館ふるさと山口文学ギャラリーにて、企画展「山口県立大学郷土文学資料センターのあゆみ」（平成29年1月10日～4月27日）を開催しています（3月18日には、同図書館にて、シンポジウム「郷土文学資料センターの今までとこれから」も開催）。なお、今年度より、大学全体の組織改編により、当センターは、図書館とともに、大学の「学術情報センター」内に位置づけられました。大学附属機関ではなくなりましたが、文学を通して地域と大学を結ぶ「絆」としての役割は、今後ますます重要になってくるかと思います。設立の趣旨を生かし、地域と深くつながる学術研究機関として、これからも歩みを進めてまいります。これまでご協力・ご支援いただいた学内・学外の皆様に感謝申し上げるとともに、今後の当センターの活動についても、変わらぬご理解･ご支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

▲　開所式　和田健氏

郷土文学資料センター開設30周年に寄せて
墨書の看板

福　田　百合子（本学名誉教授／センター運営協議会委員）

郷土文学資料センター開設への過程は、山口県にも近代文学館を、との夢から始まりました。センターの委員を当初から担当していただいた故和田健氏など先輩皆様方の熱心な要請活動があったのですが、なかなか実現しませんでした。その時点での成果として、山口県文学年表の作成、各所に散在する資料調査などがあります。それらの中核拠点として、資料センターが、やっと設置されたのです。

当時の中山清次学長、上野さち子文学部長によって、附属図書館入り口に、力強い墨書の看板が掲げられた時の高揚感は忘れられません。図書館業務とのスミ分けや、文学館機能の充実への思いを込めて、県立図書館内に文学ギャラリーが実現したのも資料センターとの連携を願ってのことでした。

大学において資料センターの担う役柄、資料の収集整理に加え、研究分野と地域貢献の視点から、画期的な構想として期待されるようになったのです。外部委員としても、萩・岩国・阿東などから各地域の事情熟知の方々を招き、学内委員との会議も熱気を帯びたものでした。

各地公民館の改築などによる図書室の縮小や、小・中学校統廃合で廃棄される多くの歴史・文学資料の危機的状況を一同深く憂慮し、今、取りかからねば、との意気込みなのです。

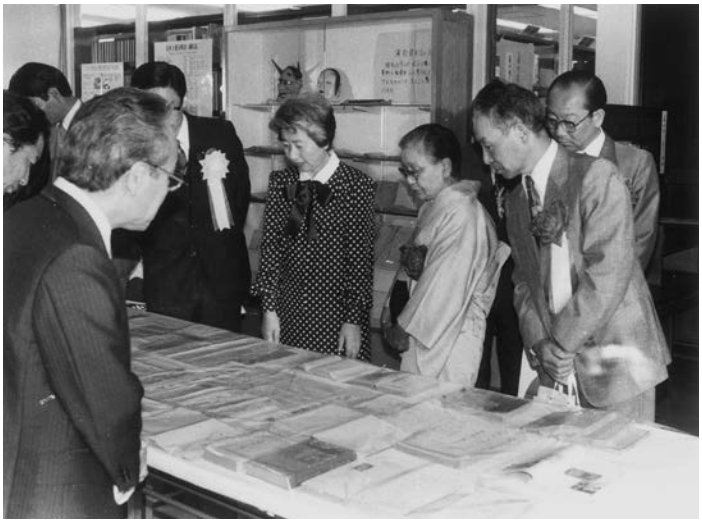
山口県文学回廊構想推進協議会の発足や、関連の文学ツアーや出前講座を持つようになったのも、センターの会議の中での発想や提言によります。「山口ゆかりの文学者たち」の冊子発行も、その流れからでした。

山口メセナ（企業団体等による地域文化支援助成）からの援助も受けた資料が入ったり、認知度も着実に広がっているようで頼もしい限りです。

またゼミ学生の参加で、資料目録作りなど急速に進められることは、本当に有難く感謝しなければと思います。

附属図書館正面に掲げられたあの墨書の看板は、今、３号館内の日本文化資料室前に移されています。学生の皆さん達には、より身近に感じられているのかも知れません。

開館30周年を迎えるに当たり、発足当初の理念への再確認も新たに、果たすべき役割の大切さを胸に、更なる発展をと念願致し、共に励みたいと改めて決意したことです。三十年の継続を心よりお祝い申し上げます。



▲　開所式資料閲覧風景（中央　福田百合子氏）

「附属郷土文学資料センター」設立前史

熊　本　守　雄（本学名誉教授／センター運営協議会委員）

附属郷土文学資料センターの設立に先駆けて、山口女子大学国文学科が1980年に発行した『山口県に伝存する国語学国文学国語教育関係文献（写本版本）目録』の中で、私は「国文学関係文献資料調査によせて」として、次のように記述している。（その一部を以下に抄出する）

○

今日、山口県下の市町村立の図書館や公民館には、地元の篤志家によって、写本・板本等の和本が寄贈されていることが多いが、人手不足や専門家のいないこともあって、せっかくの蔵書が、全くの未整理のままで放置されており、虫損や黴害に対して全く無防備の状態におかれている。また、これらの文献の所在が世に弘く知られていないために、死蔵されたり、世に周知される以前に消失する場合もなしとはしない。

諸文献の散佚を防ぐ意味からも、研究者ならびに県民のための、総合的研究や文化的教育的啓蒙、普及活動に資するためにも、これらの資料の博捜整理が急がれるのである。県内各地に散在する文献資料を網羅的・組織的に調査収集し、整理保存することは、ただちに着手されなければならない急務である。

○

最近、われわれの先祖の遺産ともいうべき文化財や史蹟を保存し、保護することの急務が叫ばれている。一旦失われたものは、再び帰ることはないからである。

そして、山口県においても、最近は地下に埋蔵されている文化財の発掘調査は盛んに行なわれている。同時に、地上にあって知られざる資料も明らかにする必要がある。その内、歴史史料・文書については、県教育委員会文化課・山口県文書館が中心になって、全県的に精力的な調査が行なわれている。

近年、各地の文化遺産・文献は学界の共有財産とすべく、組織的な共同研究の形で、調査・蒐集・整理の作業がなされて、各地において、その成果も公にされつつある。しかし、山口県に関するかぎり未だ全県的、網羅的な文献目録は存在していない。

そこで、われわれは山口県立の大学に所属するものとして、祖先の残した県下の国文学に関する文献・資料を至急調査し、これまで埋もれていたものを探し出し、新たな価値を発見すると共に、すべての古文献の保存をはからなければならない。そうしてせっかく今日まで持ち伝えられてきた貴重な文献・資料を活用し、かつ後代にまで残すように努力すべきであり、それがわれわれに課せられた重大な責務だと思うのである。

▲『山口県に殿損する国語学・国文学・国語教育関係文献目録』

この任務を痛切に自覚し、先に述べた如き文化的不幸を憂慮するが故に、本学国文学科に所属する教員ならびに学生の全員が一丸となって、身近に散在する文学資料の点検を思い立ち、各地に散在する文献資料の所在調査および文献目録の作成の事業に着手している。そして併せて文献の蒐集・整理・保存（文献のフィルム化）とその公開（資料刊行）の実現をも意図している。

歌仙絵馬をみる

國　守　　進（本学名誉教授／センター運営協議会委員）

昨年末、萩市の絵馬調査に関わって歌仙の絵馬を調べる機会がありました。調査の過程で狂言「歌仙」のなかに歌仙絵馬の人物が抜け出る話のあることがわかりましたが、鷺流狂言の「歌仙」にはなかったため稲田教授にお聞きしたところ、和泉流の「歌仙」にあることがわかりました。両者の粗筋は次の通りです。

①鷺流―内裏の歌合わせに小野小町・柿本人麻呂・在原業平・僧正遍昭・猿丸大夫・清原元輔が会して歌を詠み合ううち、小町の「色見へて」の「て」を「で」とするを良しとする人麻呂と反対する遍昭とが喧嘩を始め遍昭が人麻呂に打擲されてしまう。②和泉流―ある男が玉津島明神に詣でて三十六歌仙絵馬を神前に掛け祈願して退出する。すると絵馬の中から人麻呂・小町たちが現れて名月のもとで酒宴を開く。ところが小町が盃を遍昭に渡したことから人麻呂らが反発、小町の歌をめぐって争い、人麻呂たちが遍昭を打擲したため、遍昭が小町を連れて人麻呂たちのもとに押し寄せてもみあうが、夜明烏の声に驚いてもとの絵馬にもどってしまう。

絵馬から抜け出る話は『今昔物語』や『伽婢子』などにもみられます。伝説の美女小町をめぐるいがみあい、それも僧侶の遍昭がからむ筋立ては大変人間臭く、いかにも狂言にふさわしいといえましょう。

ところで、歌仙絵馬には六歌仙・三十六歌仙・百人一首などがみられますが、本県の場合、三十六歌仙が多く、江戸・明治時代の60例ばかりが認められています。しかし、36枚の絵馬がそろっている例は少ない。今回の調査では、まず春日神社（萩市）絵馬を対象とし、36枚のうち、２枚だけを長押から外して裏面を調べたところ、安永10年（1781）完成、願主・筆者　菅野基式、絵　永富久則であることがわかりました。永富氏は益田家お抱えの雲谷派の絵師です。菅野基式は儒者と推測されるが目下調査中です。江戸時代からこの絵馬の筆者は「関白近衛公」だとされてきましたが誤りでした。

▲　源重之（春日神社絵馬）

▲　中務（六所神社絵馬）

六所神社（萩市）には32枚が残されていますが、歌の筆跡は見事に消えています。ただ裏面の墨書で歌人名と彼の位置を示す左右番号がわかる場合がありました。消えてしまった「中務」板表面の下隅に筆者の《南溟》印がありました。彼は山根南溟（～寛政５年）、藩主の側儒や明倫館学頭に任じた高名な儒者でした。絵馬の調査が難しいのは、大概の絵馬が神社に掛けられて風化が著しく、また、歌仙絵馬は拝殿の長押などに釘付けされていることが多く、裏面を確認しにくいことなどが原因でしょう。それは私の拙文の原因でもあるのです。

芥川龍之介の文学碑

田　村　悌　夫（センター協力員）

芥川龍之介の実父新原敏三（にいはらとしぞう）の出生地は、玖珂郡生見村湯屋（現岩国市美川町）で、山口と広島の県境の山中の寒村であった。彼は16才の頃、四境戦争（安芸口大野）に参戦、維新後上京し、勧農局下総御料牧場に入所する。

明治15年、渋沢栄一の箱根仙石原の牧場・耕牧舎に入る。渋沢は進取の気に富む敏三を雇って、牛乳やバター等の乳製品を東京築地の外国人居留地で販売しようとした。

明治16年に敏三は芥川フクと結婚した。フクは本所区本所小泉町（現墨田区両国）の士族芥川俊清の三女で、極めて小心で内気な気質でこの時24才、敏三33才であった。姉二人誕生後の明治25年３月１日に長男龍之介誕生。ところが９ヶ月後に母フクが発病（精神分裂病）し、龍之介は母の実家の芥川家で、母の実姉フキによって養育される。

明治35年11月、龍之介の実母フク死亡。同37年８月、新原龍之介は養子縁組により「芥川龍之介」（13才）となった。

龍之介は東京帝国大学英文科在学中、菊池寛、久米正雄、松岡譲らと第４次『新思潮』を創刊。そこに発表した短編小説「鼻」が夏目漱石に激賞され注目を浴び、小説家として華々しいスタートを切る。当時は島崎藤村、田山花袋ら自然主義文学が全盛を極めていたが、芥川は東西の古典に材をとり人間に潜むエゴイズムを徹底して追求し、独自の視点で再構築し「鼻」「羅生門」「河童」等珠玉の短編約150編を発表。しかし、やがて健康を損ね虚無的になり、昭和２年７月24日、36才の若さで睡眠薬自殺を遂げた。

▲　芥川龍之介　筑摩書房版「日本文学アルバム」より

昭和63年３月、岩国市美川町大字生見の新原敏三父祖の菩提寺・真教寺に、「芥川文学碑」が有志により建立された。

本是山中人（もとこれさんちゅうのひと）　　芥川 也寸志
芥川 瑠璃子

その左に副碑あり。（「侏儒の言葉」）

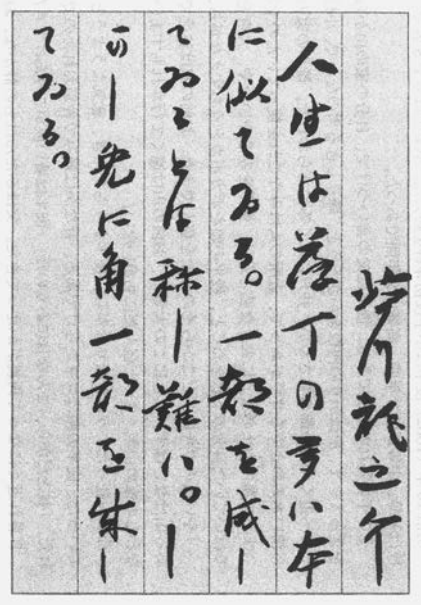
芥川 龍之介

「人生は落丁の多い本に似てゐる。一部を成してゐるとは称し難い。しかし兎に角一部を成してゐる。」

説明板には、「芥川龍之介は大正５年東大卒後海軍機関学校教官となるが、翌６年６月、航海見学で軍艦金剛に乗って横須賀から由宇まで来航し、帰途錦帯橋見学のため岩国へ来ている。橋上から東北の山々を望見し、岩国の奥と聞いていた父の故郷を心中に銘記したと思われる。帰郷後に開催された「羅生門出版記念会」で揮毫したのがこの碑文で、龍之介が岩国での記憶を深く心に秘めて書いた望郷の一文である。」と書いてある。

地元では日本最高の「芥川文学碑」と自負している。

▲　岩国市美川町になる「芥川文学碑」



▲　副碑の原本となった芥川龍之介の真筆　沖本常吉著「芥川龍之介以前」より

『山口県文学年表　年表編・解説編』刊行の頃の郷土文学資料センターの思い出

森　川　信　夫（センター協力員）

記憶がおぼろげではありますが、『山口県文学年表』の「年表編」と「解説編」を刊行する作業スタッフの一員として、私が郷土文学資料センター協力員の任務を拝命したのは、平成４年（1992年）頃だったような気がします。山口県立大学の名称が山口女子大学で、文学部が設置されていた時でした。熊本守雄教授がセンター所長で、福田百合子教授・武市眞弘教授・竹野静雄教授が学内の研究員、和田健氏・清永唯夫氏らがセンター運営協議会委員として、会をリードしていらっしゃった印象が残っています。その頃、徳山市立中央図書館の元館長で詩人の田辺朝一氏から推薦されて、私は防府地区担当の協力員になりました。

山口県内をいくつかのブロックに分け、各地区の担当協力員と、学内の研究員の先生、センター運営協議会委員が分野を分担し、かつ共同しながら、県の文学史に関する調査・執筆作業が行われました。

「年表編」のための原稿は、センターで書誌用と事項用とに区別し用意されたＢ６サイズの手書き用カードの各項目に、一枚ずつ内容を記入し提出しました。「事項編」については、私の場合は当時のワープロ専用機で作成した原稿をフロッピーに入れ、紙原稿と一緒に提出したような記憶があります。「年表編」のための手書き用カードに記入した内容も、私はワープロ専用機で勝手に年表の様式を作成し、「事項編」と同様の形式で提出したような気がします。今から考えると、余計で勝手なことをしたのかもしれません。

作業進行管理など諸々の事務局の業務につ いては、当時まだ助手であった安光裕子教授が担当でした。私などは待てど暮らせどなかなか原稿を出さなかったので、その対応には随分と苦慮なさっていたようです。

私のように、なかなか原稿を出さない協力員がいたせいもあって、『山口県文学年表　年表編・解説編』が一冊になって刊行されたのは、平成13年３月のことでした。編集作業は、安光氏と当時助教授であった清原万里氏が中心になって行われ、膨大な量の手書きカードや原稿を処理するのに、大変な御苦労をなさったということを聞きました。完成までに10年近い歳月を要しており、「山口県文学年表」執筆者・協力者一覧を見ると、都合34名が執筆・編集等に関わっています。

余り役に立たない協力員でしたが、私としては、若月紫蘭・上田保・千田九一らを始めとする、全国区でありながら地元では意外に知られていない多くの防府出身文学関係者についても本書の中で紹介できたことに、少なからず満足感を覚えています。

郷土文学資料センターの思い出

武　市　眞　弘（センター元研究員）

山口女子大学国文学科は中高の国語教員、司書・司書教諭を希望する学生が多かった。そういう学生に混じって教員も熊本先生に率いられ、昭和50年代なかば以降、防府（図書館だったか）、60年は梅雨明けのころ五十鈴川文庫（県神社庁）、63年春は三隅町公民館、平成初期の夏は中山学長も一緒で阿川八幡宮（確か当誌11号に安光先生が言及されていた）、そのほか、奈古、萩図書館、福田先生発見資料等所蔵の柳井市村上家などにおいて漢籍・国語国文学関係資料の整理・調査を行ってきた。学生においては教室での「書誌学」の実習の役割を担ったであろう。また、資料センター設置の理念にも見合う作業でもあった。

山口県立文書館（上野先生に付き添って資料センター開設の挨拶に行った。広田暢久元副館長と対談）は早

くからあり、旧家からの寄託・寄贈を含む古文書類・歴史史料ならびに古典籍が収蔵されている。昭和61年４月設立の「郷土文学資料センター」の目的は、個人・団体の所蔵資料や新しく刊行された県内ゆかりの文学資料･同人誌等の寄贈寄託をお願いすることと、収蔵資料の整理･研究・紹介・展示、およびそれらに関する情報を収集・発信するにあったかと思う。この情報発信は寄贈者に対しては謝意表明であり、多くの人々に対しては所蔵資料の紹介でもあって、平成十年代なかごろにこの紙面の表紙に記されている名称で以て年２回刊行されてきたのである（やや記憶の錯誤があるかもしれないが）。寄贈資料の整理や原簿への記入などでは学生や院生、例えば三宅君たちの協力を得ながら。

いま、附属図書館の入口に中山学長と二人で上野先生が、あのいかにも重そうな、看板と言ったほうが分かりやすいような表札を抱えて、にこやかに報道各社のフラッシュを浴びておられたあの日から早30年が過ぎ去ったかと思うと、時の去るのは、音速より早い光速より、もっと早い気がする。

山口県立大学附属

郷土文学資料センターだより

創刊号 2003年 4月

創刊の辞 － 熊本守雄

山口県立大学の前身である山口女子大学に、附属郷土文学資料センターが設置されたのは、昭和６１年のことで、５月１５日（木）に開所式が行われました。その時に発行されたパンフレットには「本県出身文学者及び本県に関係のある文学資料の調査、収集、整理、保存、展示を行うことにより、郷土の貴重な文学資料の流出、散佚を防止し、大学における文学の研究・教育を一層推進するとともに、広く県民に公開し、学芸の振興を図る」と設置の趣旨を述べております。

その後、１７年の間に、運営諮問会の委員ならびに歴下各地の協力員の方々の厚いご支援もあって、今や約１３，０００点を超える資料を、当センターにご寄贈頂いております。

又、その間、毎年、県下各地で公開講座（「ふるさとの文学」）を開催してきました。更には、多くの方々のご助力を頂いて、Ａ４判の３０６ページからなる『山口県文学年表　年表編・解説編』を平成１３年３月に出すこともできました。これは当センターが行ってきた調査活動の集大成として企画されたものでした。

ただ、このような当センターの活動も、当方の広報不足といった怠慢もあって、県民の方々には、充分なご理解を頂いているとはいえない状況にあります。

当センターの活動内容の一端でもご理解頂けたら、と考え、この度、会報を発行することと致しました。品悪のないお気付きをお寄せ頂きたく存じます。（センター所長）

▲ 『センターだより』創刊号

あらためて「郷土文学資料センター」設立30周年のお慶びを申し上げたい。そしてこの「郷土文学資料センターだより」が、資料提供者を含め、県内の関係諸機関・関係者の多くに、その名に恥じない情報把握のツールとして、ますます存在価値を高め、期待に応えるものであり続けることを祈念するものである。

「山口県立大学郷土文学資料センターのあゆみ」展

加　藤　禎　行（センター研究員）

郷土文学資料センターは、平成29年１月10日㈫から４月27日㈭までの会期で、山口県立山口図書館併設「ふるさと山口文学ギャラリー」において、「山口県立大学郷土文学資料センターのあゆみ」展を開催しています。30周年を迎えた郷土文学資料センターが、これまでどのような活動を積み重ねてきたのか、またどのような資料を所蔵しているのかを、地域のみなさんに判りやすくお伝えすることをねらいとした展示です。

▲ 「山口県立大学郷土文学資料センターのあゆみ」展

当センターのあゆみとしては、『山口県文学年表』の刊行に到るまでの歴史、地域で継続的に行われてきた公開講座、センターが収集している地域で発行された雑誌および書籍、地域に向けて開催される鷺流狂言保存会の学内公演といった、さまざまな活動を時系列順にお示ししています。

また、当センターの所蔵資料としては、これまで「ふるさと山口文学ギャラリー」ほかで展示してきた、嘉村礒多・中本たか子・楢崎勤の関係資料に加え、宇野千代・川口重美・斯波四郎・高樹のぶ子・太田静一といった、これまであまり展示する機会が多くなかった作家の関係資料も出品しています。また荻原井泉水の渡辺砂吐流宛書簡や、与謝野鉄幹の林瀧野宛書簡も、地域のみなさんに見ていただけるように複製パネルを作成しました。

今回の「山口県立大学郷土文学資料センターのあゆみ」展は、山口県立大学文化創造学科の展開科目「地域実習」の一環として調査研究を行い、科目を履修した県立大学学生の学びの成果としての側面も持っています。地域のみなさまにおかれましては、機会がありましたら足をお運びいただければと思います。

寄贈図書（2016年6月～2017年1月）

中原中也記念館『太宰治と中原中也』、山口市教育委員会『洞春寺歴史資料仮目録』・『山口市文化財年報』9・『大内氏築山跡』・『常徳寺庭園』2、金井道子『句集　鳳仙花』、河村正浩『俳句つれづれ』、防府野村望東尼会『望東尼物語』

寄贈雑誌（2016年6月～2017年1月）

『あらつち』第705～708号（あらつち社）、『火山群』第54号（岩国文学協会）、『佐波の里』第44号（防府史談会）、『其桃』第859～865号（其桃発行所）、『山口県歌人協会会報』第20号（山口県歌人協会）、『颶』第102～103号（颶文化会）、『山彦』第134～137号、（山彦発行所）、『大内文化探訪』第34号（大内文化探訪会）、『文芸山口』第328～331号（山口県文芸懇話会）、『地橙孫新聞』第16～17号（兼崎地橙孫顕彰会）、『小宇宙山口県支部報』第6号（コスモス短歌会山口県支部）、『やまなみ』第33号（やまなみの会）、『'16現代山口県詩選』第53巻（山口県詩人懇話会）、『すばる』vol.51（すばる俳句会）、『風響樹』第48号（風響樹同人）

編集後記

▼『郷土文学資料センター』28号を届けします。本号は、山口県立大学郷土文学資料センター設立30周年記念特集号です。▼30周年記念特集号には、本学名誉教授で当センターの運営協議会委員である、福田百合子先生と熊本守雄先生、國守進先生、協力員の田村悌夫氏と森川信夫氏、元研究員の武市眞弘先生にご寄稿いただきました。福田先生は、開所式に掲げられた墨書の看板に触れられ、「発足当初の理念への再確認も新たに、果たすべき役割の大切さを胸に、更なる発展を」とわたくしどもにエールを送られ、また熊本先生は、「せっかく今日まで持ち伝えられてきた貴重な文献・資料を活用し、かつ後代にまで残すように努力すべきであり、それがわれわれに課せられた重大な責務」と述べられています。30周年を迎え、センターの設立時を振り返り、果たすべき役割を再確認する、よい機会でありましょう。▼30周年記念行事として、①平成29年1月10日㈫から4月27日㈭までの間、山口県立山口図書館ふるさと山口文学ギャラリーにて「山口県立大学郷土文学資料センターのあゆみ」展を開催し、②同年3月18日㈯、山口図書館第1研修室にて、福田百合子先生と熊本守雄先生をお招きして、シンポジウム「郷土文学資料センターの今までとこれから」を行いました。▼昭和61年5月15日の開所式に立ち会った者としては、30周年という節目の年を迎えることができて感慨深いものがあります。なかでも、『山口県文学年表』の作成には、故清原万里研究員の尽力を抜きに語ることができません。また、アロハシャツを着て、ハワイのコーヒーとお菓子を用意して、ご自宅に暖かく迎えてくださった故和田健先生の郷土文学に対する熱い想いは、後世に伝えていく必要がありましょう。▼これまでセンターだよりの編集を担当していた木越俊介研究員は、昨年9月末で異動となり、安光が編集担当となりました。

▲　設立25周年記念懇談会

山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502　山口市桜畠3-2-1）
TEL.（083）928-0211　　FAX.（083）928-2251
■発行日：2016（平成28）年6月30日